中標津町郷土館だより

2001年特別号

日　付　平成13年7月10日
発行所　中標津町教育委員会
標津郡中標津町丸山２丁目22番地
電　話　教育委員会(01537-3-3111)
郷　土　館(01537-2-2190)

中標津町における蝶類の新規確認種の記録

これまで中標津町においては83種の蝶が確認されていましたが（註1）、2000年に3種の新規確認種がありました。

①和名［イチモンジセセリ］　学名［Parnara guttata Bremer et Grey］

- 町内丸山4丁目3-3（緑ケ丘森林公園内）、1♂、2000.7.25、イボタノキ吸蜜中を採集
- 町内字西中標津28線北8号（浄水場付近）、1♂、2000.10.5、ムラサキツメクサに静止中を採集

- 北海道には土着しませんが、飛翔力が強いため、本州から集団で北海道に移動してきます。
- 道央、道南での記録は多いのですが、根室・釧路支庁管内ではあまり多くありません。
- 中標津町では迷蝶と思われます。

②和名［オオイチモンジ］　学名［Limenitis populi jezoensis Matsumura］

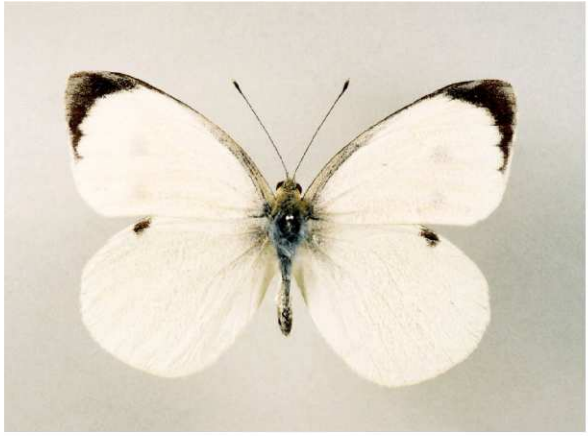
- 町内字俵橋17線、1♀、2000.7.30、林から線路跡に向かって飛翔中を採集

- 大型のタテハチョウで、国内ではオオムラサキの次に大きな蝶です。
- メスはオスにくらべてめったに人目に触れることがありません。
- 根室管内では一部を除いて確認例がありませんでした。

③和名（オオモンシロチョウ）　学名[Pieris brassicae brassicae Linnaeus]

- 町内丸山公園内（丸山直下の遊具）、夏型1♂、2000.7.12、遊具付近飛翔中を採集
- 町内西町3丁目65（緑ケ丘森林公園直下）、夏型1♂、2000.7.29 ； 夏型2♂、2000.8.12

  ※　3頭ともムシトリナデシコ吸蜜中を採集
- 町内標津川河川敷（東橋～真橋間）、夏型1♂、2000.9.22、飛翔中を採集

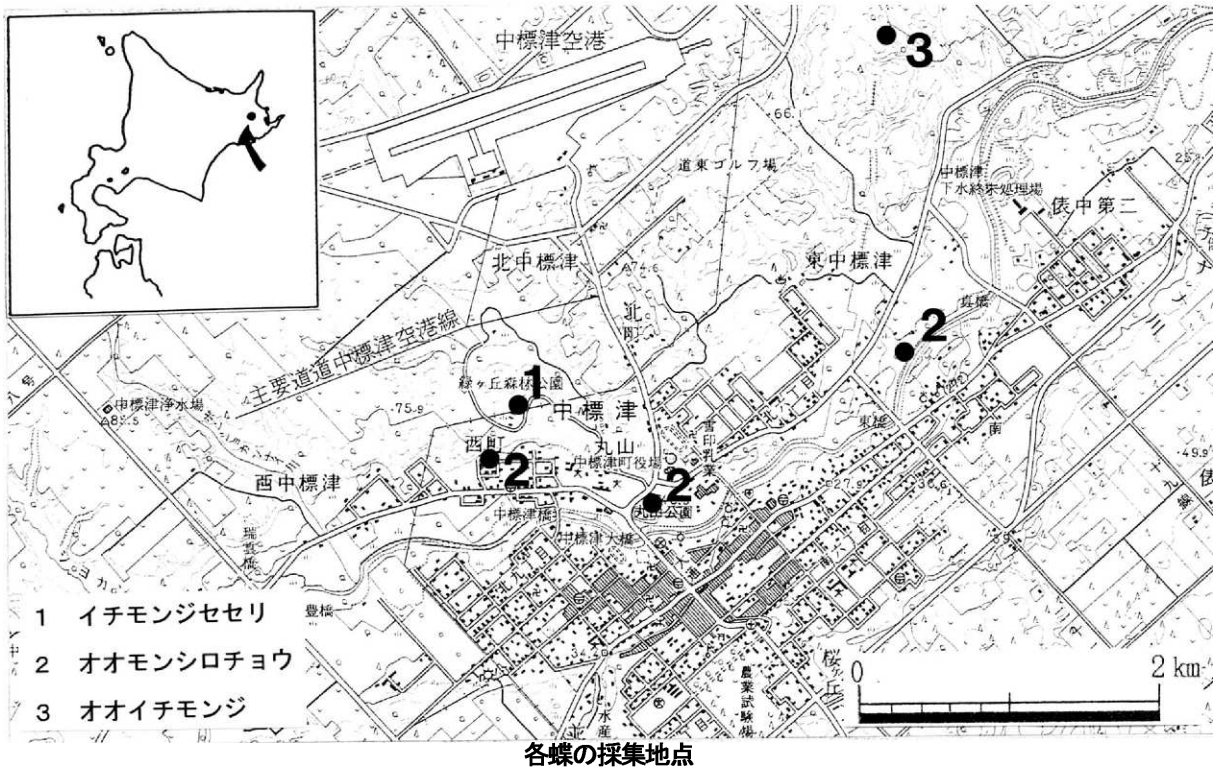


- ヨーロッパではキャベツの害虫として知られています。
- 1996年に北海道共和町で確認されて以来、道内で急速に分布域を広げ、2000年には中標津町を含め、全道の市町村から確認された外来種です。
- モンシロチョウとは大きさ、模様（羽根の先の黒色部分の形が違う）ともに違います。

〔追記〕　この他にも、町内字中標津1353-5にて夏型1♂（2000.7.31）が三井伸之介氏によって採集されています。

以上のことにより、中標津町産の蝶の確認種は86種となりました。今後も調査によって確認種が増える可能性があります。

オオモンシロチョウについては、今年は春から活発に飛びまわっています。しっかり定着したようです。



各蝶の採集地点

註1　①「根室国中標津町産蝶類目録」、『郷土研究なかしべつ』、平岩康男、1977　、　②「根室国中標津町産蝶類目録」、『jezoensis №26』、平岩康男、1999

中標津町のチョウ

アゲハチョウ科

01.ウスバシロチョウ
02.ヒメウスバシロチョウ
03.キアゲハ
04.ナミアゲハ
05.カラスアゲハ
06.ミヤマカラスアゲハ

シロチョウ科

07.エゾシロチョウ
08.モンシロチョウ
09.エゾスジグロシロチョウ
10.スジグロシロチョウ
11.ツマキチョウ
12.エゾヒメシロチョウ
13.モンキチョウ
14.オオモンシロチョウ

シジミチョウ科

15.ウラゴマダラシジミ
16.ウラキンシジミ
17.ムモンアカシジミ
18.アカシジミ
19.オナガシジミ
20.ウスイロオナガシジミ
21.ダイセンシジミ
22.ミドリシジミ
23.メスアカミドリシジミ
24.アイノミドリシジミ
25.ウラジロミドリシジミ
26.オオミドリシジミ
27.エゾミドリシジミ
28.ジョウザンミドリシジミ
29.トラフシジミ
30.カラスシジミ
31.エゾリンゴシジミ
32.コツバメ
33.ベニシジミ
34.カバイロシジミ
35.ゴマシジミ
36.ルリシジミ
37.スギタニルリシジミ
38.ツバメシジミ
39.ヒメシジミ
40.アサマシジミ
41.カラフトルリシジミ

コヒオドシ

タテハチョウ科

42.ヒメカラフトヒョウモン
43.カラフトヒョウモン
44.ナミヒョウモン
45.コヒョウモン
46.ウラギンスジヒョウモン
47.オオウラギンスジヒョウモン
48.ミドリヒョウモン
49.クモガタヒョウモン
50.メスグロヒョウモン
51.ウラギンヒョウモン
52.ギンボシヒョウモン
53.オオイチモンジ
54.イチモンジチョウ
55.コミスジ
56.フタスジチョウ
57.サカハチチョウ
58.アカマダラ
59.シータテハ
60.エルタテハ
61.ルリタテハ
62.キベリタテハ
63.クジャクチョウ
64.コヒオドシ
65.ヒメアカタテハ
66.アカタテハ
67.コムラサキ

ジャノメチョウ科

68.ヒメウラナミジャノメ
69.ベニヒカゲ
70.ジャノメチョウ
71.ウラジャノメ
72.ヒメキマダラヒカゲ
73.クロヒカゲ
74.オオヒカゲ
75.ヤマキマダラヒカゲ
76.サトキマダラヒカゲ
77.シロオビヒメヒカゲ

セセリチョウ科

78.チャマダラセセリ
79.ミヤマセセリ
80.キバネセセリ
81.イチモンジセセリ
82.ギンイチモンジセセリ
83.カラフトタカネキマダラセセリ
84.コキマダラセセリ
85.コチャバネセセリ
86.オオチャバネセセリ

※　下に線の引かれているものは、これから見られるチョウです。
夏休み中にいくつ出会えるか挑戦しては？

エゾシロチョウ（6 月下旬）

道 端 の 野 菜

・イ ラ ク サ

子供の頃野山で遊んでいて土手を上ろうとして滑ってしまい、ぐっと近くのものを握ったところそれが不幸にもイラクサだったりする。しまったと思うが、しばらくの間は手がちかちかしてしまう。苛草と書きその名の通り苛々するのである。

あのちかちかはトゲに含まれる蟻酸が原因であるらしいことは知っていたので、今はやりのインターネットを駆使し検索してみたが、あまり苛草のことを熱心に研究している方はいないらしく、せいぜいアリのケンカで相手にかける毒ぐらいしか詳しいことは調べられなかった。しかし、学名の「ウルチカ」という名は、棘されると痛いの意味であるとか、花言葉は「意地悪な君」であったりするのは昔からイラグサはちかちかしていたということがわかる。

調べていて気がついたのだが、不幸にもイラクサに触ってしまい苛々している場合は、その毒が蟻酸であるならばハチと同様の酸性毒なので、市販されているキンカンなどを使うと毒が中和されちかちかがなくなるのではないか、と。とはいえ、わざわざイラクサをぐっと握ってみる気もなく、どなたか勇気ある方の報告を待ちたい。ただし、実験してそのとおりではなくとも、ちかちかの責任はとらないのであしからず。

食べ方はいたって簡単で、棘の迫力も十分発揮していないまだ小さいほんの出たての頃のイラクサを根本から摘み、よく洗って鍋で煮る。その後アク抜きのため水に浸し、お浸しでいただくのである。味はそんなに灰汁も強くなく癖もなくであるが、サクサクとしたすこし歯ごたえのある食感が何ともいえない。今思えば上品で高級な感がある。食べていたのは子供の頃で、よく母がタンポポやアザミやイラクサを食卓に並べていた頃があり、きっと山菜の食べ方でも研究していた時期があったのでもないかと思う。

あまりうまそうだとは思えないが、はじめに食べた方に、なぜこのようなものを食べる気になったのか聞きたいものである。きっと食べる前に手で触ってみたのだろうなぁ。ちなみに、口の中で舌がちかちかすることはないのでご安心を。

（中標津町役場農林課　西村　穣）

～　町内で見られるイラクサ　～

エゾイラクサ

ホソバイラクサ

ムカゴイラクサ

『根室管内の植物』（粟野武夫・粟野節著）より